

生きたい思い 医師は寄り添って

「もう二度と起こっては
しへない」。公立福生病院
(東京都福生市)の人工透
析治療を巡る問題で、治療
を中止して亡くなった腎臓
病患者の女性(当時44歳)
の夫(1)が毎日新聞に手記
を寄せた。一度は選んだ
「死」を前ためらい、揺
れ動いた夫妻の姿が浮かび
上がる。

透析中止 死亡患者の夫

「(透析を)やめれば1
週間の命です」。A4判2
枚の手記によると、妻は昨
年8月9日、病院の外科医
(50)から透析をやめる選択
肢を示され、意思確認書に
署名した。「妻の気持ちは
揺れるばかりで、なかなか
入院しようとしなかった」
という。14日、入院。「死
ぬための入院」だなんて誰
が想像し得たでしょうか。夫
は妻の車椅子を押し、病院
近くのスーパーマーケット
で妻のためにタオルなどを
買った。夕方、妻は「離脱
(透析中止)を撤回できる
ならしたい」と夫に告げた。
「担当の先生とはなかなか
会えない」とも話した。そ
の夜、夫は急な胃病のため

同じ病院で緊急手術を受け
た。そして16日――。麻酔
から覚めると急いで妻の病
室に駆けつけたが、間に合
わなかった。見開いた目。
半開きの口。「苦しんでい
たのかな。安らかだったの
であれば、静かに眠るよう
であれば、静かに眠るよう
な感じのはず」。半年以上
過ぎた今も、その最期に思
いを巡らせる。

痛いようだった。周囲に迷
惑をかけたくなかったのか
もしれない」。一方で「生
きたいという思いを持って
何とか透析に通っていた。
透析離脱の選択肢が示され
なければ、今も生きていて
くれたと思う」。

病院に対し、夫は「怒り
の気持ちはない」という。
ただ、「医者なのだから、
一人一人の命を預かってい
るのだから、患者に寄り添
って生かしてほしい」と心
情を吐露。「本当は(治療
中止を)勧めない方がいい
のではないかとつづった。
妻とは30年間、付き合っ
た。一緒にいるのが当たり
前だった。透析患者やその
家族には一人の遺族とし
て、こう伝えたいという。
「生きることは難しいこと
だが、生きていてほしい」
【梅田啓祐、矢澤秀範】

デジタルプラス
手記全文